

有島武郎研究

——『或る女』の成立をめぐって(一)——

宮野光男

一

明治四十四年一月、有島は「白樺」に「或る女のグリンプス」を連載しはじめた。以下断続的に十六回にわたって書き継がれ、大正二年三月、一応のまとまりがつけられた。今ある「或る女」前篇の原型ともいへべき作品である。瀬沼茂樹氏はこの「或る女のグリンプス」と「或る女」前篇とについて繰り返し「(一)『或る女のグリンプス』は『或る女』前篇と」比較し初稿と改訂された完稿との間にある明確なモティフ及びテーマの移動を確認すべき」(「結婚前後の有島武郎(下)——教授時代のうち——」、「文学」昭41・11、これと同じ所論が、新潮社版日本文学全集19付録「『或る女』をめぐって」、昭37・8にもみられる)関係にあるものであると述べ、今後の「『或る女』研究の課題の一つがここに存在することを指摘している。勿論、今日まで、『或る女のグリンプス』に言及した論がなかったわけではない。『或る女』との比較も試みられている。しかしそれらは、明治四十年代を、改作された大正八年と直線的に結びつけてしまうものや、部分的比較にとどまり、結論的には「増補関係であり、主題の変化はない」という共通の結論ないしは見通しに立つ

有島武郎研究 ——『或る女』の成立をめぐって(一)——

ものが大方であったといえよう。そのような状況の中で、やはり「或る女」研究にとって、「或る女のグリンプス」論は、有島の人間観の形成過程もしくは主題の形象過程を知るためにぜひ通らなければならぬ関門の一つであると思われるのである。勿論、安川定男氏山田昭夫氏のすぐれた有島武郎論において、「作家前史」、あるいは「精神史の問題」として論究されてはいるが、さらに、作品に即してその主題の追究がなされねばならぬ必要を感じるのである。

瀬沼氏の指摘のように、両者の間には何らかの意味でちがいのある作品であると考へうる外的条件がいくつかある。「或る女のグリンプス」を書きおえた大正二年三月から、「或る女」前篇を起筆した大正八年二月までの六年間という年月は、諸家の指摘のように有島にとってけっして短い時間ではなかったということも、その一つの条件であろう。また「或る女のグリンプス」執筆中途で、有島はすでに、

「或る女」につき多大の御同情多謝々々。よかれ悪かれ兎に角僕は終局迄行く積りに御座候。一冊としての出版は考へ物と存候。あれはほんの筆ならしにて、僕にも少し自信あるものを提供

し度しと存居候。自分独得の領域を得能ふやう思はれ居候。〔有島生馬宛書簡、大1・5・22〕

二

『或る女のグリンプス』の女主人公田鶴子の性格上の特色は、何といつても状況に対して反抗的な反応を示す型の女性として描かれていることであろう。作品の冒頭部分の、新橋駅頭での、

青年の前で若奥様と呼ばれたのと、改札の叱咤とは針の様に鋭い田鶴子の感情の平衡を狂はした。今迄で急ぎ気味であった足はびったりと動かなくなつて、車夫の方に向き直つた。〔一章〕

諸点を獲た。〕〔日記、大5・3・28〕という発言にしても、有島がこの時、改作のための理論、新しい人間観を求めていたことを逆に察知することのできる手がかりであるといえる。勿論、改作という事実が、有島の新しい人間観発見の目論見の形象化が志向されていたことを示すかどうかは、『或る女のグリンプス』の主題を考察し、『或る女』前篇と比較しなければ確かめることができないことである。が、ともかく、『或る女』成立論をすすめるための『或る女のグリンプス』と『或る女』との比較の前提として、比較的手簿であった『或る女のグリンプス』の考察を、その人間観の分析と主題の追究という観点から始めてみたいと思う。以下、まず『或る女のグリンプス』について、(1)田鶴子にみられる反抗的人間像の分析と、その内的意味の追究、(2)回想部分の分析による田鶴子の内部葛藤の理解、(3)運命観の特色とその説明、の三点から考察してみよう。

という田鶴子の態度はその意味で、まことに象徴的である。外界の刺激に対する心中での鋭敏な反応、この反応の部分は、かならずしも表現されていない場合もあるが、その反応にもとづく行爲が、外界の刺激(者)に対して、はなはだ挑戦的であるのが特色である。これは作中の人間関係、あるいは状況に対する決断の時にしばしば展開する田鶴子の基本的な反応パターンである。ある意味では『或る女』論の定説であるローファーとしての薬子像の特色を、田鶴子にも見ることができそうなところなのである。もともと、すべての人間関係が、このパターンだけで説明されるわけではない。木田、木村、倉地などとの関係はもう一つ、別の関係の中で問題にされていることもあるし、古藤義一に対する場合のように、不思議なことに全くと言ってもよいほど反抗反応を示していない存在もある。それらの関係については、それぞれのところで詳述するが、ともかく外面的には、この反抗反応は田鶴子の性格上の顕著な特色である。

ところで、状況に対して反抗的に生きざるを得ない田鶴子にとつて共通している状況とは、何らかの意味で彼女の生を疎外する力として認識されているということができよう。たとえば、木田との関係を支えていたもの、つまり彼女の本来の興味の中心は、彼との性格、容貌の類似の中に「自己の反影を——発見して、其人に対して好奇心を挑発せられずに居られぬ」(「二章」)のことだった。ところが、「母なる人の激しい猜疑の目が二人の跡を影の如く逐つたといふ事実」が「端なく(も)田鶴子の情火に真剣の油をそゞ事にな」(「二章」)つたというのである。つまり自らの運命を他者の内部に見い出そうとする本来的な願いが関係を支える絆だったにも拘らず、それが外発的な力によって阻止されることによって、はからずも恋の様相を帯びてしまったのである。あるいはまた、赤坂女学校時代の、教師の田鶴子に対する抑圧に対しては、その学校のよつて立つところのキリスト教に対して、あるいはキリスト教に関わりのある人々に対しての反抗というかたちで表面化していることを知ることが出来る。

田鶴子のこの反抗については積極的に評価する考え方が一般的である。勿論それは葉子についての意見であるが、その人間像の特色として「叛逆」的であることを指摘し、そこに「或る女」の主題があるというのである。山田昭夫氏は「(八)背徳(九)の信子が、(八)叛逆(九)の葉子に愛慕した」のだという葉子観を持っている。西垣勤氏はその意見を肯定しつつ、さらにその実践的意図が「俗物クリスチャンの否定」にあり、少くともそのことが社会倫理の上からは背徳行爲である信子の恋を肯定的に描くための源動力を、そこに見い出すこ

有島武郎研究 — 「或る女」の成立をめぐる(一) —

とができるというのである。しかし、ここで田鶴子の「反抗」が所謂ホイットマン流の叛逆であったか否かは、いささか疑問であるといわねばなるまい。あえて言うならば、田鶴子にとって本当に問題だったのは「反抗」という姿勢そのものよりも、彼女をして反抗せしめる内的原因ではなかったかと思うのである。

たしかに有島は、作中で、いわゆる俗物クリスチャンと思われる者たちを完膚なきまでにこきおろしている。そこには一種独特の鼻もちならぬ雰囲気漂よっている世界への挑戦を見ることができよう。ただ、このところに、たとえ有島がキリスト教に対して持っていた批判の一端が露呈しているとしても、それがそのままに田鶴子の生の根柢となつているとは考えられない。つまり既成の権威、習慣、秩序に対する叛逆の論理に支えられたものとして形象化されてはいないと思われるのである。笹淵氏の「葉子はキリスト教と対決する彼女自身の立場、本質については明確な認識を持っていなかった(とくに前篇において)」という指摘は、田鶴子にもあてはまることである。彼女の反抗は、ただ自らの生を疎外する状況に対するいわば本能的な反抗であり、そのような俗物を醸成排出するに至つたキリスト教の内包している病弊「因習と伝説」に対する批判にまで高められ深められてはいないのである。安川氏は、宮本百合子の『或る女』評のいちばんの要が、「作者は女主人公の苦痛に満ちた激情の転々の根源をついて、それを描破しているかというところではなくて、女主人公の不幸の最大原因が何であつたかということをや女主人公が理解していないと同時に作者自身もはつきりこの点を作品の中に描き出していないという点にあつた」とし、これが「

或る女」の弱点をついた批評の中でも「絶対に見すぐすことのできないもの一つである」としている。しかし、これは有島の中に、外部のものに対する批判の根柢がなかったことの反映ではなく、田鶴子という人間像を形成することの本意がそこになかったことを逆に表わしているのではないかと思われるのである。

ここで再び田鶴子の、状況に対する反抗が、何を意味しているかを問わねばならない。

絵島丸の事務長倉地三吉との関係は、これまでに問題にされたところでは、たしかに積極的な意義を付与されているという意見が多い。その多くが、倉地との関係を裏づけるものが、ホイットマン流の本能的生活への志向、あるいは古い権威、道徳に対する叛逆ということで説明されているようである。しかし、はたして、「或る女のグリンプス」の時点において、そのような考え方が有島の中に定着していたかどうかは、はなはだ疑問なのである。なぜならば、倉地という存在も、本質において木田と何ら変りのない一種の「分捕品」としての価値しか付与されていないからである。「田鶴子と母との戦いが「母に対する勝利の分捕品として」〔第二章〕木田を掌中に納めたところで終っていたことを想起することができる。」

「思いがけなく」倉地の口から「又俺を馬鹿にしやがるな」という「火のやうな告白」を聞いた田鶴子は、それまで通りにすすり泣きは続けて居たが、その涙の中にはいつのまにか「いつわりの涙」をまじえ「戯曲的につくろひ」〔十七章〕すらする余裕を持ってしまうのである。このことは、木田の場合がそうであったように、田鶴子が「一種の征服者」であることを表わしている。そして、倉地

が被征服者つまり「分捕品」であるがゆえに「田鶴子にとっては征服の瞬間の喜びの外に分捕品は何等の慰藉にもならぬ」〔十六章〕いものである。田鶴子の前に現われてはその名も消え去って行った他の男たちと同様に、倉地もまた「やゝもすると平気で自分を離れて行くといふ致命的な豫想」〔十七章〕に苦しめられていた田鶴子の苦悩というものは、倉地との関係が事実上成立したとしても、それが「分捕品」であるかぎり、決して癒やされるはずのものではないのである。「或る女」の後篇を待つまでもなく、すでに、このところにおいて倉地との関係が一種の破れを描いているものと云えよう。つまりこの関係が田鶴子の生を積極的に支えうる叛逆の精神によつて肯定的に支えられているものではないのである。このことから、有島は「叛逆」を描くべくして描き得なかつたのではなく、始めから生の疎外への「反抗」の内的必然性を描かんとしていたのではないかと思われるのである。

この倉地との関係を、有島は、現象的に進展させる一つの要因として、田川夫人への反抗反応によつて描出している。これまた反抗反応の中で描出されていることの中には、むしろ逆に、反抗の本質をその中に見い出さんとする有島の積極的な意図を感じることができよう。有島は「法曹界で可なり名の聞えた割に、何処と云つて取りとめた特色もない政客」田川の夫人を、「私の強い情のほしいまゝな、野心の深い割りに手練の露骨な、夫を軽視しながら夫から独立する事の出来ない、根底の平凡な婦」〔九章〕という、いわゆる旧い型タイプの典型として描いている。夫婦そろつて田鶴子にとつて人間の魅力の乏しい存在である。そのような存在であるが故に

田鶴子への心理的圧迫がたえ難い侮辱として受け取られているのである。この田川夫人の倉地に対する露骨な独占欲、所有欲を目のあたりにして、田鶴子は持ち前の反抗心を燃し始め、はげしく嫉妬するのである。

夫人は〔略〕

「事務長は貴女のお室に遊びに見えますか」と云った。かつと田鶴子の心は理不尽な焼きつく様な一種の嫉妬を感じた。わざと落付いた「ironical」な調子で、

「はい、お見えになります。それが何ぞ……」とありもせぬ事をしらすらと云った。〔十二章〕

クリスチャンへの反抗と同様、田川夫人という、これまた一種の俗物の発する刺激に対する反応としての反抗である。このような種類の反抗が、外に向って働く力強い力、意識的な生の自己主張、あるいは自我成長の要求といった原動力に支えられるということは不可能であろう。もしそうだとすれば、いったいそれを支えているものは何であろうか。という問が再びもち出されてくるのである。先に生の疎外に対する反抗ということばづかいをして反抗反応の説明をしたが、このことは、換言すれば人間存在の内部にある無意味さ、存在の空虚さへの反抗ということになる。人間存在の内部にあって人間の生もしくは生の展開を疎外するものは、それ以外にはないからである。このような内部葛藤の存在が、田鶴子の反抗という行為のパターンの中で一応把握することのできる原因であり、「或る

有島武郎研究 — 「或る女」の成立をめぐる一 —

女のグリンプス」の主題追究を可能にする一つの手がかりとも云いうるものではないかと思われる。この問題の解明は、さらに、田鶴子を捕えてはなきぬ孤独感、不安感の分析によって明らかにされる。

三

「或る女」の中で、とくに頻繁に出て来る回想部分が重要な役割をはたしているという意見がある。たとえば、西垣氏が「葉子の現在の人間像が統一的に把握されるために回想部分が全体の中で、有機的に生かされていると肯定的にとりあげているが、これは正論であろう。氏は、他の評家の回想部分に対する意見の紹介（註6）をしているが、それらに対する否定的な評価の部分をも含めて賛成である。

作品の中で回想部分が重要な役割をはたしているという意味では「或る女のグリンプス」においても同様である。元来、有島の精神構造は、過去を、到達しえた段階において明確化し、評価、位置づけすることによって、未来への道を見出ししていくという慎重な生活態度を特色としていた。日記の中で、何か事があるたびに——たとえば、誕生日とか、年末とか、親しい者の死などをあげることができると——自らの過去を顧みている例は枚挙に遑もないほどである。評論、中でも、「『リビングストーン伝』第四版の序」（大8・3）などは、その典型の一つであると言っても過言ではあるまい。この回想部分が、作品の中で重要な役割を果たしているであろうことは、作品構成上からのことだけではなく、本論の第二章で予見した田

鶴子の内部葛藤を明確に形象する働きもしているのである。西垣氏は、回想部分について「基本的には何故葉子が倉地と結ばれねばならぬかの必然に役立つ^(註七)」と、大変鋭い指摘をされている。それにもかかわらず、「手法的によしとしてもその内容は現在の葉子とずれているのではないか」という指摘がなされているが、そのことについては、必然の内容が実は十分に分析検討されなければならぬということ、田鶴子にとっての必然性が葉子にとっても必然的であったか否かという点に問題があると思われる。

さて回想部分についてであるが、ほとんど各章ごとに描かれていると言ふことができるほど頻繁に出てくる。この部分には田鶴子という人間像についての有島の解釈がなされているようである。つまり、そこには、田鶴子が、孤独な、不安を抱いている存在であることが描出されているのである。第六章で振分髪の時分から二十五才になった現在までの自らを振りかえり、その間の生活が、いわば「周囲を誤解し、周囲に誤解せられて」、「自覚といふものなしに」過してしまったものであり、その生活の中には何一つ自分をひきとどめておくに力あるものを見出すことのできない状況であると、「田鶴子に」思わせている。しかしその田鶴子が実はその時に「たった一人、見も知らぬ野末に立って居る様な思ひをせずには居られなかった。」というのである。直接的には、同志であると信じていた少女達が、「遠の昔に尋常の女になりすまして、小さく見える程距って、敵意と嘲笑とを含む眼をひらめかして」いたことがその孤独感の原因であるが、その背後には、一切のものを裏切られ受け入れられぬ孤独を感じている田鶴子がいる。田鶴子のこのような思いと

いうものが、他の回想部分にもしばしば描出されているのである。もう一ヶ所、倉地との関係が生じ、上陸せずに帰国してしまおうという決意をかためた田鶴子を描写した部分は、とくにその顕著な例であるといえよう。田鶴子が「勝利者らしい心持ちで」木村を迎える準備をしておこうとした時、ふと二人の妹の写真に心惹かれ、やがて感情的な高まりをおぼえながら、肉親のことを想起しつゝ、田鶴子は、

何故こんなつかしい世に自分一人だけ孤独なんだろう。何故自分のやうな弱いものを世の中は見向きもしないのだろう。(十八
章)

と思ひ惑うのである。そしてついに、「何故生れて来たんだらうと云ふ、死を願ふよりも生を呪ふ恐ろしい思ひが逼るでもなく離れるでもなく田鶴子にまつわりつい」てしまうのである。倉地との関係は、田鶴子を勝利者の「有頂天」(十七章)に導いたはずのものである。それにもかかわらず、田鶴子を捕えてはなさぬ思ひが、実は「孤独」だったというのである。

征服者に取っては自分を征服し得るものばかりが魂を奪ふ力を持つて居る。然かも田鶴子は孤独の苦しさに攻められて始終征服し得るもののみを求めて居たのである。(十六章、傍点筆者)

有島は田鶴子が征服者であるにも拘らず孤独なる存在であることを実感せねばならぬ事情を、このようにいう。「征服者」田鶴子を支

えているものが「征服」の喜びではなく、何ものかを「征服」していかざるを得ない、換言すれば、充たされなければならぬ空虚さであり、それは堪えがたい敗北感をその内部に秘めているものでもある。『或る女』はしばしばトルストイの「アンナ・カレニナ」と比較をされているが、有島のアンナに対する共感も実は征服者であると同時に敗北者であるアンナの中に人間の本質を見出したからであらう。

神はかゝる人類を生み出す。そしてそれは、必ず苦しむ。憐れな魂よ！生れながらの征服者であると同時に生れながらの敗北者——この世の中の最も悲劇的な逆説である。〔中略〕彼女はこの世に属してゐるものではないのだ。——迷子の天使とでも云ふがよろう。可愛相な魂よ！〔日記、明40・3・23〕

このような状況を有島は「孤独の苦しさ」という言葉で言い表わしているのである。

回響部分からは、さらに田鶴子の木田と別れてからの飄落的生活を支えていたものが「底のない不安感」〔九章〕であったこと、あるいは、母の没後全く孤独な生活を続けていた田鶴子が「始終張りつめた心持と、失望から湧き出た捨て鉢の快瀾さ」とを以て、鳥が木から木に果実を探るやうに、人から人に欲求を求めて歩く間に、すいと何処からともなく襲って来る「不安」を感じ、「底知れぬ憂鬱の沼に蹴落」〔十六章〕されるような思いにさせられていることなど

有島武郎研究 — 『或る女』の成立をめぐる一 —

を知ることができるのである。

不安、それは人間の限界状況における認識の一つである。不安は人間の存在そのものに關わる根源的な状況についての感情でもある。不安な状況の中に未来は存在しない。存在するものは無だけであり、人間にとってそれは「いかになりゆくかわからない」ものなのである。田鶴子が、いかに反抗的に、あたかもそれが「反叛」を思わせるような生活をしたとしても、その根底に「不安」が巣くっているかぎり、その生活は虚しいものでしかないのである。この田鶴子の「不安」が、有島の生活体験の反映であることは、当時の運命観、自然観をみても明らかである。有島は自ら闘わねばならぬものとして、運命を、不可抗的にせまってくる「人称化された運命」を感じしていた。そしてその運命が「死」を本質としていたことも、『或る女のグリンプス』論に即していえば、まことに暗示的であるということができよう。

人間をその根底から絶望に陥らせる「不安」と「孤独」とが、田鶴子を根源的な虚無の世界に徘徊せしめているということができよう。そしてまたこの「不安」と「孤独」とが田鶴子に人間関係を志向させ、倉地との関係の中に確かさの根拠を求めさせているのである。反抗、それは、その関係が人間にとって本質的に無意味であり、そこに可能となる世界が虚無でしかありえぬことへの一種の焦燥感と抵抗とを表わしているのである。

田鶴子が木村を夫として選んだのも、実は、この「不安」と無関係ではなかったことを知ることができる。

彼女〔田鶴子〕が感じた不安の念は、とうとう田鶴子を駆って、木村と云ふ降参人を其の夫に扱はしめた。田鶴子は自分の征服者である事を忘れて——知らないで覚悟のしやうによつては、一生涯木村と連れ添って普通の夫婦のやうな生活が出来るものだと思つて見たのであつた。然しそんなつきはぎな考へがどうして田鶴子の不安を医す事ができよう。〔十六章〕

そして木村もまた、田鶴子の根源的な不安を解消するための力にはなり得ぬ存在であることを有島はこのように描出しているのである。もつとも、木村という存在には、西垣氏の指摘にもあるように田鶴子の経済的な支持者としての価値が認められている。しかし、木村という存在は、田鶴子の米国行、つまり、「過去の伝説を絶ち切つて伝説のない新しい社会に這入る〔十一章〕」ためのいわば踏み台のような存在でもあつた。そのことは田鶴子の「木村を夫にするのは何の屈托があろう、米国に於ける自分の生活に対して木村が自分の夫であるといふ事は、自分が木村の妻であるといふ程に軽い事だ」〔十一章〕というつぶやきからも判明することである。実は有島の米国生活における一つの収穫は、伝統的な価値を否定することの重要さを学んだことであつた。米国滞在中に、友人末光績に書き送つたエマソンの“Shake off your traditions / Stand on your own faith / Depend upon naked ability / And fear not!”という一節は、田鶴子の目的と同じものである。ところで、有島が米国生活そのものの中に、伝説と囚習の生活を見出し、失望のうちに帰国したことは周知のことである。そのことがその「伝説を絶

ち切る」生活を志向した田鶴子に、米国生活をさせなかつたところにあらわされているということもできよう。ともあれ、米国における木村との生活は二重の意味において田鶴子には無意味だったのである。

以上の回想部分に関する考察を通して、田鶴子が、所謂ホイットマン流の叛逆型の人間であることに積極的な意義を見出す根拠は一応ないということができよう。勿論、本来的な意味での叛逆が人間の自らの限界状況の認識を、あくまでも基本的な条件とするものであることは云うまでもないことである。しかし「或る女のグリーンプス」に形象化されている人間像は、有島にとつて本質的には否定的な存在でありながら、その否定すべき「孤独」と「不安」のみが実感される人間だといふことができる。否定的存在である者が、そのことにおいて肯定的に——つまり反抗というかたちをとることによつて、否定の存在価値を是認されたものとして——描かれているため、あたかも作者有島が肯定的な人間像を描出しているかの錯覚に陥つてしまう恐れがあるといふこともいへよう。一見、自由奔放な、あたかも自覚した新しい女を志向する者のやうな生活が描かれていることも、そのことにあづかつて力あるように思われるのである。このような孤独と不安にさいなまれている否定的な自己認識に立つ存在としての田鶴子が、有島の人間観といかなる関係にあるかということが、つぎの問題となる。先にも述べたように、有島の運命観、自然観がそのための一つの手がかりとなるが、観点を變えて、日記における女性観を手がかりに考えてみたいと思ふ。

有島の間人観、とくに日記における女性観の考察の一つの手がかりとして、聖書解釈における女性観をあげることができよう。そこには、田鶴子にみられる否定的人間像の原型を見出すことができると思われるのである。

明治三十四年七月、札幌農学校を卒業した有島は、その年の暮の十二月、一年志願兵として第一師団歩兵第三連隊に入隊し、一年間の兵営生活を体験した後、約半年の準備期間において渡米し米國での学生生活に入るのであるが、その間の有島の生活は、概ね札幌時代の延長であったということができよう。聖日礼拝への参加・聖書研究などが、精神生活の中核をなしていたことなど日記を通して詳に知ることができる。中でも、二月八日付の日記の内容は、ヨハネによる福音書第八章の前半部分に関する聖書解釈であるが、非常に興味深いものである。「Expositor Bible」^(註1)からこの第八章の一節から十一節の部分が聖書の原典にはない挿入部分であることを知った有島は「云ふ可からざる失望を感じ」たというのである。それは「事実が虚無に帰するとは、世の何物よりも痛ましき事」であることに加えて、実は聖書のこの部分が有島の「愛読し」た、「之を讀む毎に云ふ可からざる美感胸に逼りて余の如きすら清き高き涙に誘はれざるを得」ない箇所だったからである。そして、この部分を「説話として葬り去るに當り」有島が受けた感化を書き記しておくというのである。内容はいささか長文なので重点的に引用してみたいと思う。

有島武郎研究 — 「或る女」の成立をめぐって(一) —

聖書がイエス・キリストを中心にして書かれていることはむしろ当然のことであり、註解書がキリストに焦点を絞って説明することもまた当然のことである。しかし、そうであればあるほど有島のこの部分に対する力の入れ方は異常である。有島は明らかに「姦淫の女」に力点をおいて書いているのである。「説話として葬り去る」ということが、有島を聖書の枠からはずれさせて、自由に本心を吐露せしめたことになるのであろう。その意味では、本来的な意味での聖書理解とは言い難いかもわからぬが、それだけに有島の本音を知りうる一つの材料であるということが出来る。

(1) 我が心の奥深く行きぬ。「中略」我は其處に一人の若き婦を見出しぬ。名を Eg. と云ふ。彼女実に見るに麗はしかりき。其血には若き情躍り、其眼は愛の輝きにうるみぬ。而して見よ、我は実に彼女其者なりしなり。

まず内容が、「我が心の奥」底の出来ごとであるといい、「我は彼女其者」であると規定していることに注目したい。女を Eg. と名づけていることからして象徴的である。このことは、姦淫の女の出来ごとが他ならぬ有島自身の内的な問題に支えられたものであることを意味している。

(2) 我遂に一人の夫を持ちき。されども我が愛は成就せられず。我が心は痛ましく悲しき大なる空虚を得ぬ。空虚夜となく昼となく我が心は告げて云ふ。汝我を満たせ。然らざれば汝は悶死せん。汝の心

を満し得ざるものは、汝の夫にして汝の夫にあらず。汝の愛は空しく朽つるに堪へず。汝何ぞ愛を軽んずるやと。

今彼女に問題となつてゐることは「愛」の問題である。しかもそれは「成就」の喜びを知らぬ愛である。有島はこのところで、何故に愛の成就を全うしえぬのかというかたちでは問うていない。ただ自らの「全愛」が満たされぬが故に「空虚」だといふのである。愛は元來關係概念である。關係が生じていないところに愛が存在しているはずはないのである。「愛は、われにしがみついて離れず、なじみ、さへ自分の「内容」や対象としてしまふような感情ではない。いや愛はわれのうちにはなく、まさにわれとなんじのあいだにあるものなのである。」^(註)にも拘らず「全愛」と称するのは、關係への希求の一種の激しさを物語つてゐるということができよう。

愛の欠落の自覚、それは人間をして孤独なる存在であることを痛感せしめるものである。そこではあらゆる生の意味づけが絶望的に不確かなものになりはててしまふ。女は、空虚の中に手を差し入れまつたかの恐ろしい孤独の状況におち入つてしまつてゐるのである。人間の虚無的状况がこのところに端を発していることを見ぬいてゐる有島には、人間の本質を直視する眼がすでにそなわつていたといえよう。

(3) 嗚呼神よ、実にそは罪なりき。我はそを知りしかども、人の子は是れに逆ひ立つべき力を知らざりし。我は遂に姦淫を敢てしぬ。

〔中略〕姦淫の一夜は蜜の如き甘き夢なりき。されどそは忽ち醒

めて、悲しいかな、我が心には空虚復廣まりぬ。〔中略〕空虚は猶我にそを満たせと囁くなり。我此時深く惑ひぬ。我が夫ならぬ人も我が全き愛に酬ゆる能はず。我が此熱き胸を冷すに足らず。

我が全愛の酬はれざるは、是れ人間一般の運命にあらざるなきやと。かくて我我が前にありくと死神の恐ろしき腕を認めぬ。我が心は思はず戦けり。

(4) かくて我一日又姦淫を犯せり。学者とパリサイ人は是れを見て、直ちに我が腕を捕へぬ。

再び言うが、有島は何故に愛が成就しないのかを問題にしていない。つまり、その問を持たぬことが、実は、關係を希求しながら自らの存在が關係の中で確かなものにされる契機であることに気づかぬ原因なのである。そして、その結果としての空虚を満たすべく、むなし行為である姦淫をあえて続ける女を描くのである。本来、空虚という状況を満たすべきものを希求する主体が存在していたにも拘らず、あたかも、「空虚」そのものが、行為の原動力であるかの如き位置をしめてゐるのである。空虚におし出された人生、「人間の生」が逢着するところのものが、空虚以外のものでありうるはずはあるまい。その意味では、「我が全愛の酬はれざるは、是れ人間一般の運命にあらざるなきや」という問は、まさに運命的に認識された彼自身の独白に他ならないと思われる。

姦淫という背徳行為が積極的な意義を持つとすれば、それは、前提となる人間關係が、本質的な意味において無価値なものであるか

あるいは本当の人間関係を防げるものに対する抵抗の一つの手段としてとられた場合であろう。これらの場合、新しい彼らの人間関係を「姦淫」とするのは、旧い打破さるべき側の価値規準なのであって、当事者にとっては否定し破壊し去るもの以外の何ものでもないのである。ところで有島が、この聖書に觸発されて描いた一人の女の世界は、いかなる世界であろうか。愛を渴迎している女が、夫との人間関係において本質的に満たされず、かえって、そのことによって満たさねばならぬ空虚な穴を自らの存在の内に見出ししてしまう世界である。これは明らかに、有島の発想の内にある人間存在の空虚あるいは欠如の実感が一人の姦淫の女の姿に定着されているところであろう。つまり、ここには、いかなる人間関係をもって来ても、充足されぬ人間、本質において欠如した空虚な人間が問題とされているのである。いわば第三の姦淫ともいうべきものなのである。

(5)彼の若人——我は一目にて其基督なるを知りぬ。——其類には云ふ可からざる同情ありき。

(6)我 Ego は此時云ふ可からざる懺悔と、懺喜と自責と感謝との涙に震ひ戦きぬ。

女の空虚は、キリストの愛によって満たされた、とするのが、この時期の有島の一応の結論であるが、その部分は、引用からも理解されるように、はなはだ観念的である。(5)の前後には、キリストに

有島武郎研究 — 「或る女」の成立をめぐる(一) —

よる罪の告発者に対する反撃と姦淫の女に対する教えとが記されているのであるが、その部分の記述内容は、聖書の、もしくは注解書の記述の範囲をでていない。つまり女を描くときの自由さはすでに失われてしまっているのである。事実、有島にとって、キリストの愛はたしかにはげしく希求されるものであった。さらに一種の理想であったということもできる。すでに拙論で述べたように、当時の有島は「僕が福音に、恥とせらるゝ事」(日記、明34・2・23)を畏れ、「基督の愛の限りなきを知るが故に、余の心は益々暗黒の渦中に入」(日記、明34・3・19)り、「基督の愛を知」りつゝ彼を愛することのできない者であることを「苦痛」(「」)としていたのである。つまり、信者としての謙遜の分をさし引いても、なお、キリストの愛を自らの内に実感することのできない存在だったのである。その有島の思いが、この女に托され、「懺悔」と「自責」を伴いつつ、「懺喜」と「感謝」の涙に「震ひ戦」いているのである。

姦淫の女の話から、キリストに関わる部分を削除した場合、あとに残るものは運命的に姦淫を繰り返さねばならぬ女のみということになる。自らの空虚さを満たさんとしてもがく女、それはまさに田鶴子の現実の姿ではなかったらうか。田鶴子もまた、孤独と不安とに怯えつゝ、それから逃れんとしていた女だったのである。勿論田鶴子がキリストの愛によって生きようとした女でないことは事実であるが、たとえそれが何と名づけられようと、かねてから抱いていた充足させようものへの期待を持っていたことには変わりはない。それは否定的自己認識とは表裏をなす期待であり、姦淫の女の期待に等しいのである。「姦淫の女」が田鶴子の原型であるとするのも

この故なのである。

五

以上の考察から『或る女のグリンプス』の主題が、一切のものから拒まれ閉め出されている田鶴子を通して、人間が孤独なる存在であることを明らかにしようとするものであるということができよう。そしてまた、その孤独の中から、自由に自己の主体性を回復せんとして自ら選び決断し確かめてゆかねばならぬ者であるが故の不安を抱いた存在であることを、明らかにしようとするものではないかと思うのである。勿論この考えに対して、すでに『或の女』論において指摘されているように、たえず出て来る運命観が、このような主題設定に対する反論の一つの手がかりになることは事実である。人間が事物存在と同様に所謂宿命論、もしくは決定論に支配されているのであれば、そのうちに不安の生じる余地はないからである。しかし、『或る女のグリンプス』〔『或る女』についても運命観に關しては本質的に同じく〕における運命観は決して、そのような運命観ではない。倉地との關係において「運命」を思う田鶴子は、思いを倉地に書きやるともなく書いているうちに、思わず「死」という言葉を書いて愕然とするのであるが、これは、人間の限界状況が認識されつゝあることが、はしなくもあらわれているところであろう。思えば、Ego、もまた空虚の背後に「死神」の「恐しき腕」を認めて戦慄する者であった。

不可抗的にせまってくる生の不安と、田鶴子が船中で体験する幻

想場面〔十三章〕とは無關係ではないはずである。あるいはまた田鶴子の「崖の際まで来た」〔十一章〕という自己認識も、単にそれが現実的な経済生活のゆきづまりを表わしているだけではなく、人生における敗北の予感であろう。人間がみずから断崖に身を投げはしないかと恐れるときの「不安」は田鶴子にあらゆる生の意味づけも絶望的に不確かなものとしてせまってくるものである。彼女が完全に空虚であり、全く孤独なる存在としての自己を、死に直面した時、自己の内部に見い出すゆえんである。田鶴子にとって、この不安なる状況が、まさに運命的に追ってくる実感として形象されているのである。

私は生れると〔き〕から呪はれた女なんですもの。私、本統は神様を信するより——信するより憎む方が似合つて居るんです……〔略〕……神様は私見たいなものをどうなさるか見て居ます。〔二十二章〕

運命ということばが、神ということばにおきかえられた時、もち前の反抗的心情がわき起り、思わずこう云うのであるが、これは、ともすれば限界状況の中で意気阻喪してしまい虚無の中にのめり込んでしまふような自分が、いったい、いかなる生を生きることになるのかという問を自らに発しているところでもあるであろう。自分は所詮は「生れるときから呪はれた女なんですもの」という田鶴子のつぶやきは、有島の「カインの末裔意識」につらなる否定的自己認識を（註14）あらわす本音とも思えるが、この問に、田鶴子自身がいかに答える

か、ということが、実は有島に対する一つの期待として持たれるのである。それは自己の内部にある虚無の認識の顕現としての反抗が有島自身の回復の理論を得て、いかなるものへと質的变化をとげるかという問でもある。そのことを考えるために、さらに、有島の自己回復の可能性——新しい理論追究を、明治四十年代における日記、評論さらには改作された「或る女」およびその周辺の作品によって考えてみたいと思う。

西垣勤氏は「或る女」補論——「或る女のグリムプス」の成立」〔「黄塵」第6号、昭43・8〕において、田鶴子には米国より帰国した有島の「挫折状況」その結果としての「虚無的」「心情」が「投入」されていると述べている。明治四十四年、すなわち、有島が「或る女のグリムプス」と書き始めた時点における状況が田鶴子像に形象化されているという意味で正論であると思われるが、本質的にはすでにキリスト教信者としての生活をしてきた米国留学以前の有島の中に、田鶴子像の可能性があったことをまず指摘しておきたいと思うのである。そして、その視点から留学中の、あるいは帰朝後の生活を捕え位置づける必要があると思うのである。

註1 「或る女のグリムプス」と「或る女」との比較研究については、私の管見では数篇あるが、その詳細にわたる検討は後考に譲りたいと思う。

註2 山田昭夫「有島武郎」昭41・11、明治書院

有島武郎研究——「或る女」の成立をめぐる(一)——

註3 西垣勤「『或る女』論——前篇の構造について」『黄塵』第五号、昭43・3

註4 笹淵友一「『或る女』の主題——有島武郎研究」、『東京女子大学付属比較文化研究所紀要』第一七号、昭39・6

註5 安川定男「有島武郎論」、昭42・11、明治書院

註6、7、10 註3に同じ。

註8 「実存主義辞典」、昭43・1、東京堂

註9 拙論「有島武郎研究——運命観をめぐる」、昭42・11、「国文学研究」第3号

⁽⁴⁾ 「有島武郎研究——教会退会後の自然観をめぐる(一)」、「昭42・6、43・6」、「近代文学試論」第三、五号

註11 The Expositor's Greek Testament [1902] 英語でギリシヤ語原文を註解したもの。R・ニコルの編集したものである。「竹森満佐」『新約聖書の註解書』昭38、教文館

註12 M・ブーバー「孤独と愛」昭33・5、創文社

註13 「有島武郎研究——自然観にみられるキリスト教の受容と定着の考察」『国語教育研究』第八号 昭38・12

註14 註9の(2)の(二)に同じ。